

予報本文

果樹

1 黒斑病（ナシ）

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- (1) 越冬罹病枝率は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が高く、降雨日数が多い年は多発しやすい。
- (2) 受粉直後から新芽伸長期にかけての防除が重要である。

2 カキクダアザミウマ（カキ）

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

- (1) 前年秋期は、被害は平年比やや多い（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4月下旬頃に越冬場所から新芽に移って、展開後2～3日以内の新葉に寄生する。
- (2) 4月中下旬頃から新葉をよく観察し、新葉が出始めた日から1週間以内に防除を行う。

チャ

1 もち病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 前年10月は発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ない（-）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 越冬芽に付着した胞子が3月下旬頃から発芽し始め、新芽の生育につれて若葉に感染する。
- (2) 雨が多く、じめじめした天候が続くと多発する。
- (3) 昨年、秋期に多発した園では注意する。

(4) 防除適期は萌芽～1葉期である。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：平年並（山城：前年比やや少ない、丹波・丹後：前年並）

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生量は、平年並の発生であった。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- (2) 通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- (3) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年並）
丹波 平年並（前年並）
丹後 平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生量は、山城で平年比やや少なく（－）、丹波、丹後で平年並の発生であった。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 蛹で越冬後、4月上旬～5月上旬に成虫が羽化し、新芽に産卵する。気温が高いと発生が早くなる。
- (2) ふ化した幼虫は新葉裏面の表皮下に食入し、成長すると葉を三角形に巻く。
- (3) 秋整枝をしなかった園や自然仕立て園では発生しやすい。
- (4) 巻葉内に堆積した虫糞により製茶品質が低下するので、摘採近くになって巻葉を生じた場合は速やかに摘採する。なお、摘採が遅くなる園では、幼虫の発生に十分注意する。
- (5) 防除適期は2葉期である。

4 カンザワハダニ

予報内容 発生量 山城 平年比やや多い（前年比多い）
丹波 平年比やや多い（前年比多い）
丹後 平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 3月下旬の調査では、発生量は山城で平年並、丹波で平年並、丹後で平年比多かった（＋）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年並または少ない（＋）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が上昇し、暖かい晴れた日が続くと、急速に増殖する。
- (2) この時期の防除は重要であるが、必ず萌芽前に行う。

野菜

1 菌核病（キャベツ）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 前年秋期の調査では発生を認めなかった（平年並）。
- (2) 3月下旬の調査では、発生量は平年並。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は20℃前後、曇雨天が続いた時に発生しやすい。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存可能である。

2 コナガ（アブラナ科野菜）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 3月下旬の調査（キャベツ）では、発生を認めなかった（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (2) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。

3 アブラムシ類（アブラナ科野菜）

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 3月下旬の調査（キャベツ）では、平年比多い発生を認めた（+）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少ないと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (2) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。

(3) 野菜等をは種又は定植する際には、シルバーフィルムやムシコン等のマルチを被覆するか、シルバーテープを張り、有翅虫の飛来を防止する。また、早期発見によりアブラムシ類の防除につとめる。

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 苗立枯病

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温多湿に経過するとピシウム属菌、高温多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30℃の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに薬剤防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

- (1) 病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。
- (2) 出芽時の温度は30℃を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3 苗いもち

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。
- (3) 平成25年度に中丹地域の一部でストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌が発生した。耐性菌の発生地域では平成26年度は、いもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。
詳細は平成25年11月13日付けの防除所ニュース第6号を参照のこと。

4 種子消毒について

- (1) 薬剤消毒が望ましいが、温湯消毒を行う場合は必ず乾粒を用い、処理温度と時間を厳守するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また各機種の使用上の注意事項を遵守する。

ムギ

1 赤かび病

- (1) 開花期から2週間以内に雨が多いと発病が多くなる。開花は出穂期からおよそ1週間後である。1回目の防除適期は小麦が出穂後7～10日の開花期、二条大麦が出穂期の10日後頃、2回目はそれぞれ1回目防除の7日後が目安となる。
- (2) ほ場の水はけが悪いと生育・出穂が不揃いとなり、防除効果が低下しやすいので、出穂前にほ場の排水を良くする。
- (3) 赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくる。

野菜

1 野菜苗の害虫類

購入苗の使用に当たっては、害虫が寄生していないことを確認する。なお、ハモグリバエ類、アザミウマ類、コナジラミ類など、微小なものが多いので注意する。

参 考

I 近畿地方の気象の1か月予報

(3月23日から4月22日までの天候見通し)

平成26年3月20日
大阪管区気象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	10	30	60
降 水 量	40	40	20
日 照 時 間	20	40	40

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並または少なく、日照時間は平年並または多いと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」には発生量等を予想している病害虫を、「今後注意すべきその他の病害虫等」には発生量等の予想はしていませんが、注意すべき病害虫について記載しています。

(見方の例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬（平年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「Ⅱ 用語の定義」の「4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく（-）、丹波でやや多い（+）。
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の（-）、（+）は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合は発生量が少なくなる要因、（+）は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧

・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病害虫情報サービス

・ホームページアドレス

<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－